

# 物語と科学の接点 ゴリラに探る

## 小川洋子と山極寿一が公開対談

『博士の愛した数式』などの著書がある作家小川洋子と、ゴリラ研究の第一人者山極寿一・京大教授が10日、東京・新宿で「森に描かれた物語を求めて——ゴリラとヒトが分かち合う物語」と題して対談した。

「物語と科学」はどうか交差するのか。対談は小川が進行役になり、山極が写真や動画を交えてゴリラの習性を紹介する形で進んだ。

群れから離れつつあるオス

ゴリラは一頭だけで歌い、メロディーをつけるという。「孤独を意識しているのでしょうか」と小川。一方、群れの場合、餌を食べた時に満足感を共有するようにハミングする。小川は「共感があるんですね。ないと合唱できない」。

小川の小説にはよく動物が登場する。その理由を山極が質問すると、「言葉を持たない動物を鏡にして、言葉を映し出す。そうしないと本質が見えてこない」と返答。山極

は「普通は不規則である自然の中に法則を見つけることが科学。言葉はその法則を映し出す」と返した。

山極は「僕は何事も体験しないとわからない。想像して題材が出てくるんでしょう？」と水を向けた。小川は「空想的には体験しています。河合隼雄先生流に言えば、書いているうちに『たまたま、うまいことがおこる』。言葉自体が持つ辞書に載っていない力があるんでしょう。『走る、



小川洋子（左）と山極寿一（右）東京・新宿

と書くとき、周りの景色や息づかいなども想像して読んでもらえるよう、言葉を選んで書いている」と答えた。

小川は河合隼雄物語賞の、山極は同学芸賞の選考委員で、両賞を記念する対談だった。（編集委員・吉村千彰）